

『聖書の中にいのちがある』(ヨハネの福音書 5章39-40節) 2021.7.18.
<はじめに> 39 節はイエス・キリストの言葉です。「聖書を調べなさい。というのは、あなたがたは聖書の中に永遠のいのちがあると思っているからです。その聖書は、わたしについて証しているものです。」とも訳されます。聖書に何を期待して、あなたは聖書を手にとっているでしょうか。

I 永遠のいのちがある(39)

①二つのいのち

「いのち」を身体の生命と捉えることは容易です。それは有限、死によって終わるものです。ならば「永遠のいのち」とは、どんなものでしょうか。永遠のいのちなど存在しない、と言う人もいますが、あると思う人もあります。あなたは、あなたの周囲の人は、どちらですか。

②終わりのないいのち

「あなたがた」(39)はユダヤ人です(18-19)。永遠のいのちには、不死不滅、神秘的、霊的、宗教的なイメージがあります。ユダヤ人だけでなく、古今東西の人間の営みの中にそれは見出され、意識され、大切に扱われています。

③いのちの実証

私たちはいのちの表れからその有無や状態・状況を確認できますが、いのちの実像をとらえてはいません。永遠のいのちには始まりがありますが、終わりはありません。いつ始まるのでしょうか。死後でしょうか。それとも生きている今でしょうか。

II 聖書の中に(39)

①有力証拠がある

不明を確実にするには、有力な証拠が必要です。永遠のいのちを死後からのものとするなら、生きている人は未経験です。経験した死者の証言は聞けません。しかし、永遠のいのちについて証言するものがあります。永遠の神ご自身とその言葉である聖書です。

②聖書とは

聖書は生ける神のことばで、神が靈感を与えた人々に記させました。その代表格がモーセで、ユダヤ人にとっては、モーセが民族の父祖に残した神の律法こそ聖書のコアです。彼らはそこに永遠のいのちが隠されていると捉えていました。

③律法と永遠のいのち(マタイ 19:16-22)

イエスの許にきた青年とのやり取りに、当時ユダヤ人が抱いていた理解が表れています。「いのちに入りたいと思うなら戒めを守りなさい」とイエスも言われますが、話はなお続きます。青年は真剣に取り組んでもまだ確信できず、最後は悲しみながら去って行きます。

III 聖書が証す「わたし」(39-40)

①聖書を調べなさい

聖書を持ち、読むその先のことです。厳密に分析・整理・論評する研究者になることでしょうか。まず聖書に何が書かれているのか、その物語・内容を知ることです。そして、そこに一貫しているテーマ、メッセージを汲み出し、自分の心と生活に適用することです。

②いのちに触れる

永遠のいのちが何か、どこから、どうしたら与えられ、それが人に何をもたらすのか、詳細な情報を得ても、それが永遠のいのちの実体ではありません。いのちはそれを持ち、生きることで実感できます。聖書はいのちを生きる実在を通して明らかにされます。

③わたしのもとへ(40)

先を歩んだ著名人の語録集を大切に反芻して生きる人がいます。聖書全体はイエス・キリストを指し示すと言われます。その情報・知識を得て、満足してはなりません。私たちと共に歩まれ、語り掛けられるイエスに日々お会いすることで、永遠のいのちを実感します。

<おわりに> 永遠のいのちとは死後の永遠の世界へのパスポートではありません。「御子を信じる者は(今既に)永遠のいのちを持つ」(3:16)のです。それはイエス・キリストの人格と生涯に満ち満ちており、この御方を深く知り、交わり、根ざす者に注がれます(15:4-5)。(H.M.)